青桐

茗渓会　千葉支部
青桐会機関紙
第19号
平成二十六年六月三十日発行

代表幹事あいさつ

「型」を持つ。

千葉県立君津商業高等学校
野口良和

みなさんも、御存知だと思いますが、日本のプロ野球に名球会というものがあります。打者なら、二〇〇〇本安打以上、投手なら、二〇〇勝あるいは二五〇セーブ以上の成績を残せた者だけが入会資格を持ちます。投手の二〇〇勝を例にとれば、一年に十二勝あげるとして、二百勝するには、十七年かかる計算になります。ある年に大活躍する選手は珍しくありませんが、十年以上、水準以上の成績を維持できる選手はごく稀です。首位打者や最多勝のタイトルはとらなくとも、怪我もせず、毎試合出場して、二割八分の成績を毎年残す選手が、レギュラーとして、チームから信頼される名選手ではないでしょうか。

前にあげたような息の長い選手に共通していることは、自分の「型」を持っているということです。調子の良い時も、不調の時も自分のペースを崩さない「型」を持つことが、長期にわたって安定した成績を残すには必要です。

教員という仕事でも、管理職になる、ならないにかかわらず、どんな学校種でも、どんな課程でも、戦力として信頼される教員は自分の「型」を持っています。

最近の教育界では、きめ細やかさや、数値目標の設定が喧伝されていますが、それ自体は、時代の要請として真摯に受け止め、精進しなければならないことですが、我々は、サービス業や接客業とは、一線を画す教育者です。我々は、今まで以上に、教育者としての倫理観・哲学に裏打ちされた、教育者としての「型」を持つ必要があります。教育者として、教育の基礎・基本的知識を習得し、原則・本質に基づいて、仕事で直面する問題を、客観的・多面的にとらえ、論理的に判断していける教育者としての「型」を持つということです。

もちろん、大前提として、生徒愛に満ちた人間性と教科教員としての教養が必要なことは言うまでもありません。

さて、茗渓会や青桐会の先輩や同僚の方には、見事な「型」をもった人がたくさんいます。先輩方の話に耳を傾け、御指導をいただき、また、同僚の方と、教育について意見を交わし、自分の教育者としての、ひいては人間としての「型」を模索する場として、同窓の集まる場があるということは、私たちにとって大変恵まれた、幸福なことだと思います。同窓の思い出を語りながら、同じ泉の水を飲んだ者としての矜持を持ちながら、胸躍らせて集まりたいものです。

少々、大仰な言い方をしてしまったかもしれませんが、構えて来るということではなく、人生の豊かな出会いの一つの場にしていただけたらと思います。

雑感「教育の力」に思う
―挨拶に代えて―

茗渓会　千葉支部長
秋山尚功

◇　平成3年の今頃（普賢岳噴火被害拡大中）のこと。筑波宿泊研修中の私は，生活統括者として朝礼から夜の反省会まで多忙な毎日を過ごした。感想の一端に，①若い世代に目立つ体操の粗雑傾向，②義捐金呼びかけへの善意の結集，等が浮かぶ。自身の小学校時代を思い出し，教育の影響力かと自問したものである。

◇　我々の世代は，ラジオ体操は全体が揃うまで徹底して教育された。善行と言えば，「清水選手の美談」の授業も蘇る。要旨はテニス世界大会でのこと。大接戦の終盤に相手の外国人選手が足を滑らしたが，清水選手は咄嗟に相手が打ち易い所に返球してやったため，逆に強打されて敗北。相手の不利をつく卑怯を避けた清水選手の善意こそ日本人の美徳と力説された先生。私は子ども心にも深い感銘を覚えた。

◇　青桐会員有志との地域懇談会でのこと。話題が米大統領リンカーン（以下L）像に及んだ。映画で奴隷解放者＝人道主義者としてのL像に感銘した某氏が，学年生徒にも是非伝えたいと熱く語った。惹き込まれるように私も，別の視点から愚見を述べ論議を楽しんだ。（要旨は，Lが連邦分裂の危機をどう救済するかという政策論から奴隷解放策を考える観点。その翌日，同趣旨の記事がA紙に載ったのは全くの偶然。）。私は氏の教養と意欲に敬意を表し，生徒の啓発を工夫する講話の成功を念じながら，充実した気持ちで家路に就いた。

◇　今，「道徳」教育の充実が叫ばれ，高校での実施も俎上に乗った。教材には優れた業績を残した人物の伝記等が有効だが，その評価や扱い方は時代によっても変わる。物事には様々な側面が潜むので，指導に当たっては，教師の適切な配慮が問われる。高校生向けには，「事実と真実の間」を吟味し，「多面的総合的に考察する」視点が大切と思う。選挙権の18歳への引き下げ等も話題になる昨今である。教育の影響力は将来に亘って大きい。優秀な会員各位の益々の活躍を期待する次第です。

記念講演

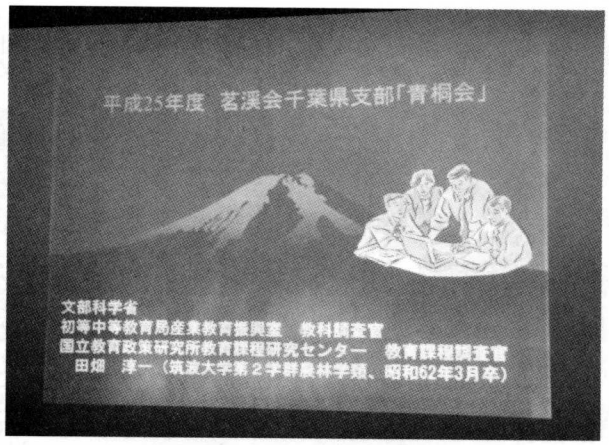
今の学校教育に求められること

講師
国立教育政策研究所教育研究センター
教育課程調査官　田畑淳一　先生

筑波大学第二学群農林学類を1987年3月に御卒業後，熊本県に農業の教員として赴任し，農業高校の甲子園と言われている農業クラブ全国大会におきましてプロジュクト発表の発表会の顧問として最優秀日本一を二回とるなど輝かしいご功績を残しております。その後，熊本県教育委員会指導主事，そして平成22年年度からは，初等中等教育局産業教育振興室教科調査官として御活躍されております。

はじめに

皆様方こんにちは。同級生（松嵜浩昭先生）に紹介されると何かくすぐったい感じですけども，田畑と申します。私も熊本では茗渓会の事務局を，会計を含めると10年ぐらいですかね，先輩からお願いされてやっていました。熊本県の活動を紹介しますと，年2回，5月下旬にある総会と1月の下旬にある新年会を催します。私が事務局をするようになったころ，とにかく筑波になってからの面々が中々集まらないというのが大きな課題でした。まぁ恐らく，私が推測するに青桐会の始まりが平成18年ということは，恐らくそうゆう中で生まれていったのかもしれないというふうにも思ったところです。



先輩から学んだこと

現場にいる時は，生徒のためということをいつも頭の中におきながら仕事をするようにしていました。農業高校ですから，地域のため，そして子供たちの未来・教育の未来のため，そして農業教育の果たすべき役割とはということを問いかけながら仕事をやっておりましたし，今もこの言葉を胸に調査官としての仕事に取り組んでいます。

先輩からは，「姿勢を大切に」ということを一番大きく学びましたね。それは「プライドを持つ」ということです。私は熊本県の出身ですが，当時私が教員になった昭和63年は鹿児島大出身者が非常に多く，校長先生方のほとんどが鹿児島大出身でした。また，農業の教員ですから，半数くらいは農業高校の出身の先生方がいるのですが，熊本農業が圧倒的に多いですね。4割くらいは熊本農業出身ですかね。じゃあ，少数である私っていうのは何を持って仕事をやるかっていうと，先輩方から言われたのはプライドを持てということでした。また，出向したときに人事を担当されていた方（平成23年教育次長になられた）に「お前にはプライドを持って，熊本の農業教育をしっかり見つめるために2年間頑張れ」と言われました。それは，どうゆうことかというと，閥にとらわれず，広く学んだことを学校の現場に戻すことがあなたの役割だからということだと理解しました。なんで僕が言われたのかなあと考えてみると，正直言って最初の三年間で，大学に戻ろうかなあと思ったことがありました。別に勉強が好きで大学に戻ろうと思ったわけでなくて，農林学類であんまり教育について学んでいないということと，当時の熊本の農業教育について自分の理想とかけ離れているのを非常に感じたことが理由でした。まあ，農業高校では，子供達っていうのが作業員扱いの授業なんですね。ひたすら生産をあてて，それによって市場出荷や販売をして収益を上げるという，まあどの県もそうですが，熊本の場合は特にその意識が高くて，「これ教育じゃないよね」っていうことをその時感じて，これは本当にそうなのかということをもう一度勉強したいと思いました。4年目に，私自身カヌーの国体選手でもあったので，カヌーの練習できる環境にと近くに川のある学校に赴任しました。そこで，農場会計を担当し，まあ草花（大学時代の専門）の部門にも入ったのですが，そこでは農家の子供たちもいて，少し実験的なものもやらせてもらうようになりました。（初任から）6年間の中でこのままではいけないなあと思ったときに，行政に2年間出向するということになりました。その中で，農業教育について自分なりに考えたときに，学ぶということを真剣に考えないといけないと感じました。農業教育はこれからどうなるのかと思ったときに，ちょうど週5日制が始まって，今のままでは農場の規模も維持できない。会計もこのままでは恐らく生徒の実習時間が減れば，教員の負担になるだろうということを感じながら，2年間の出向後に学校に戻りました。運よく，元々いた初任の頃の学校に戻れたので，仕組み的にはある程度理解できたところで始まりました。そこで茗渓とは関係ない人が農場長としていらしたのですが，週5日になり，このままでいくと恐らくみんなの負担が増えるだろうということで，1割から2割，農場の予算をカットすることで時間を作るようにされました。その後，私が農場長のとき，もう一回見直しをして，当時から言うと3割から4割も予算をカットして子供達と色んなことをやれる時間をとることにしました。そうすると，比較的時間ができて本当に農業をやりたい子とか農業教育を見つめる時間を先生たちが持てるようになりました。

茗渓の先輩にはプライドを持ってやることも大事だけれども，そういうことを見せずに，謙遜しながらやろうと，やっていることは誰かが見ているということを言われました。また，「人材育成の部分」についても話をいただきました。農業の大先輩だった先生（48歳で校長）は，退職されて18年，今は78歳になられますが，その間に農業の茗渓の教員はいません。その大先輩がいつもおっしゃっていたのは，一人しかいない人を大切にしろということでした。農業高校というのは技師さんとか，どの学校もそうかもしれないですが養護の先生とか一人ですよね。一人の先生がそのことで頑張っていて，その人がいなくなると誰かがそれをやるってことは大変なことになるんです。他に，人材育成について「教え子を教員にするよう意識しなさい」と言われました。このことは私自身初任の頃から意識していました。そして，教え子もできるだけ筑波にやろうと，今までに7人筑波に送り込み，熊本の教員になっている子もいます。まあ，彼らも何年かに一人ずつでも筑波に入れればまた繋がるんじゃないかと思ってます。一番最初の教え子が41で，今熊本で農業の教員として，私がやったことを自分なりに考えながら発展的にやっています。さっき紹介いただいた中にあった農業高校の研究発表で今年全国大会に出場しようと，本人も頑張っているところです。

これまでの実践

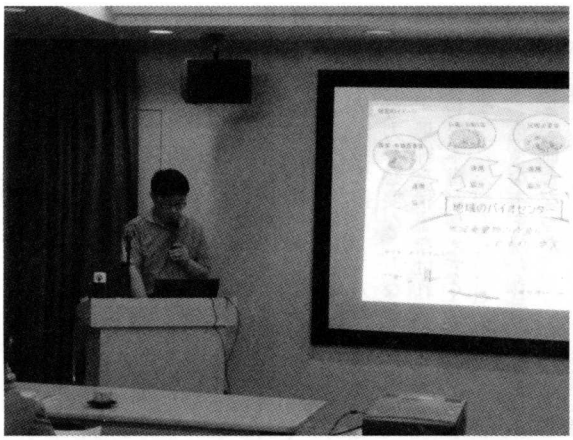
色んなことに挑戦するというのを主にやっていたところですが，特にプロジェクト学習に挑戦しました。プロジェクト学習というのは農業高校の一つの柱になっていて，普通高校でいえば課題研究ですね。それを教科内だけではなく放課後もやり，あとは発表会も全国大会まであるので，それを中心にやっていました。これも何かやり方が考えられないかということで，私が長く勤めていた（熊本県北部）鹿本農業高校は，はっきり言って部活は何も強くない。何か一つ二つできないかとずっと僕らも考えていたのですが，この「農業クラブ」と言う子供達全体が入る全国組織があるんですけど，この取組だけは他に負けないものがこれまでもあった。それで，そこをテコ入れすればと思い，その中の特に自分が担当する，担任でもあるクラスを足がかりに，自分の専門性を高める意味でも取り組み始めました（平成8年）。これは，研究が主になるクラブで，バイオ研究会という研究の部活動を立ち上げてその中で始動しました。今まで，2校経験し，行政の中で考えていたことは，農業高校はどんな学校もそうでしょうけど，結構問題行動を起こす子供っていますよね。これは，タバコであり，校内での生徒同士のいざこざ…，僕はそうのはビックリしない，いつ起きてもおかしくない。子供達の人間関係の中で色んなことがあるのはある。無いことが理想だが，起きたことは対処すればいい。でも，対処療法

では，堂々巡りになるんですね。実は，中には農業高校で何かやりたいと思って入ってくる子が結構いるんです。だから，その子達に何かできないかなぁというところで始めたのが，先ほど話をした研究部活動です。最初の担任をした生徒が筑波に行ったときもそうだったんですが，何か高校時代にやってないと大学には繋がらないんですね，推薦で行く場合は。大学に繋がるようなものといったときに，自分の今までやってきたことや，行政に行ったことからも見えてくる。これは，県の農政部とか国の色んな研究の動きを見て，子供達ができることがあるだろうということで，「環境問題」を中心に研究をするように考えました。まあ，地域の課題に取り組もうと言うことでやっていったのが始まりです。要するに，生徒のエネルギーをいい方向に繋げたいということでやっていきました。

これまでの取組

1校目が初任時代3年間，2校目，行政の通算の8年の間に，基礎が自分ではできたかなと。その後3校目は1校目に戻りましたが，その後に実践と応用の時代だったかなと思っています。それぞれを紐解く中で，今後の仕事に繋げようと思って取り組んだのが文科省事業です。それが平成15年度から3年間やった「目指せスペシャリスト授業」です。専門高校であれば聞かれた言葉かもしれませんが，そういうものに取り組んで，本格的に農業教育の中で研究活動をいかに人材育成に繋げるかということを文科省事業としてやりました。まあ，地域と連携しながら地域のバイオセンターを目指すというのを掲げながら，このことによって，ある意味農業教育の方向性を示せないかなあと大それたことを考えながらやっていたところです。

私のいたバイオ工学科では，研究は一つの授業を繋ぐ柱としてやっていき，将来的には地域産業を支える人材を育成するということでやっていきました。ですから，この研究会から育った子供達は，だいたいリーダーは国立大学に進みました。一番多いのが筑波に進学し，一クラスで二人行った時代もありました。このうちの一人が今年度から熊本の農業の教員になりました。こうゆう風に，子供達が今後の農業教員として実践してくれるといいなぁと思っておるところです。よく地域に出かけて行き，色んな人達のお話を聞きました。当時17年目研修というのが熊本であって，教育委員会が一人，外部が一人，論文や集団面接など色んな研修があったんですが，そのときにふと思ったんですが，全然教育委員会の人と話しても緊張しないんですね。別に日頃からやっていること，考えていることを面接の中でどんどんしゃべればいい。でも，今でもそうなんですけど，農家の人とか本気でやっている人と話すときは緊張するんですね。というのは，結局自分の生活を懸けてやっている人ってのは真剣な目があるんですね。別に教育委員会の人が真剣じゃないっていう訳じゃないですよ。そう言う訳ではなくて，真剣に色々な研究をやろうと言う人は，何かその中から自分の将来のこととか自分の家のこととか農業経営に繋がるようなことを，その中から見いだそうという目がそこにあるんですね。そう言うところに出て行って話ができたり，協議ができたり，討論ができたりすることで，私達もそうですが，子供達は伸びるんだと，この授業の中で特に感じました。あと，コンビニで今農業高校がよくコラボして商品開発とかやってますが，平成15年くらいに熊本農業でもやって（最初は米粉パン），僕はその間に入ったコーディネーターみたいな仕事をしたのですが，それも非常にいい勉強になりました。



その後，教育委員会に行き，人材育成を農水省と文科省が一緒にやろうという事業が始まったので，これもさっきの事業の延長で，他の学校3校を含めて挑戦してみました。これも楽しい事業でした。これは最初の「目指せスペシャリスト」にあった夢・希望・受け継がれるものと，先生方の農業教育の検証と，色んなことをその中でやって，熊本から日本の農業教育を少し方向付けようということでやっていきました。これは少し見にくいんですが，NPOと一緒に，農業の人材育成について取り組みました。やっぱり農業高校で取組をやる場合には，外の人にお世話にならないとできないというのが，これらの事業をやりながらつくづく感じましたし，国で色々言っても，やはり地方で農林水産部はいかに人材育成を考えるかっていうことが肝心だろうということを調査官として，指導主事の皆さんには話すようにしています。色んな事業を続けていく中で，担任や農場長をやっているときに感じたのですが，問題を起こす生徒は問題が明確なので，それを解決すれば何とかなる。ただ，真面目な生徒の問題点が見えないんですよね。そういう子をいかに育てるかっていうのが，私は今からの，特に専門高校の中では必要じゃないかなと思っています。じゃあ，勉強できるからそれでいいのかというと，今キャリア教育の充実と言われているのは，コミュニケーション能力がなかったり，社会に出ていってどうかというところが課題なのだろうと思います。つまり，そういう手立てを日頃からやらないといけないということだと思います。それが，これからの教育に特に必要ではないかと思っています。ですから，進学校であれ，問題がない訳ではないんですよね。勉強をやっているけども，コミュニケーションが苦手な生徒には，色んなことを話しながら面談をやるとかそういうことが必要じゃないかなと思います。新学習指導要領が4月から本格実施になって，各学校で取り組んでいただいていると思いますが，子供達の資質能力，生徒の個に対しての育成というのを重視しているというのが，この学習指導要領の一つの特徴であると感じています。仕事柄，過去のものを紐解きながら私達は次の改訂に向けてこれから動きを始めていくのですが，評価のところもそういう動きになっているということは，皆さんにはご承知いただきたいと思います。一人一人の子供達をいかに育てるかというところをこれからは大事にしながら，もちろん集団を教えていく中で，子供達との日頃の関わりの中でやっていかないとできないというところを，私もこれまで実践の中で，つくづく感じています。

今まで取り組んだ中で感じるのは，僕らと話をして，その話にのってくる子は社会にいっても大丈夫ですね。やんちゃな子ほど，大丈夫だと思います。さっきお話しした鹿本農業の教え子で，今クルマのセールスをしている子がいるんですけど，中学校にほとんど行っていないです。その彼が体験発表で九州大会まで行ったんですが，そのときに彼と発表の内容を詰めていく中で話をすると，「中学校はあまり行ってないって聞いたけど，どれくらい行ってないの？」と聞いたら，「たぶんほとんど（行ってないです）」と言って，調べてみたら1年生は本当に真っ白でした。彼が良かったのは，そのとき本を読んでいたということですね。バイオ関係の本とか，農業の本とか。そして，本当によく覚えているんですよね（本のことを）。彼は，小さい小学校から大きな中学校に行ったときに，非常に不安があったということで行けなくなって，高校でまた花が開いたというか，自分はやれるかも知れないっていうのができてきて，そのまま地元の大学に行ったんですね。本を読んでいるから色んなことを話すことができる。彼は大学卒業後，研究よりも自分は話すことが好きだからということで車のセールスに入って，今ではセールスの中で，営業成績1番なんです。彼が憎いのは，買ってくださいとは絶対に言わないことですね。僕は家族も多いので車は買わないと思っているので，「車検でいいのでお願いします」と言ってきて，車検頼んじゃうんですね。でも，その辺がね，セールスのポイントかなと思います。彼の場合は，中学校のときにそういう目にあっているので，人のことをよく見ながら話をするんですね。農業高校で学んで，別にセールスなんかどこでも学んでないんですよ。でも，農業高校で実習とかやりながら汗をかくことで，だんだんと社会に目が向いていって，大学も無事卒業して，研究にはすすまなかったけれど，セールスの道で活躍の場を見つけることができたっていうのは良かったのかなと思っています。ちょっと，雑談みたいな話になりましたけど，日頃から声かけをしながら，育てていくのが私達の仕事かなと思います。

では，最後になりますが，折角なので皆様方には，このような会にでる中で自分の意識改革というのを常日頃からやられたらどうかと思っています。あまり教育に係わるような話がなかったかも知れませんが，同窓として，私松戸に住んでおりますので，また何かありましたら一緒にお仕事とかできればなあと思っています。

私の読んだ本

日本が戦ってくれて感謝しています。

（産経新聞出版）井上和彦　著

千葉県立八千代西高等学校
教諭　岩井　剛

この本を読もうと思ったきっかけは，本校図書室の新着図書の案内だった。タイトルだけを見たとき，最初はこの本を小説だと思った。しかし，サブタイトルに「アジアが賞賛する日本とあの戦争」とあり，紹介文からしてもどうやら作り物のお話ではないようであった。その時私は，戦争が感謝される賞賛されるとはどういうことだろう，と素朴な疑問を持った。私の中の戦争に対する認識は，いかなる場合であっても賞賛される対象にはなりえないというものだったからだ。

本書の内容は「戦後の日本社会は，『自虐史観』に支配されてきた」という立場から，「封印されてきた近現代史の真実」を解き明かそうというものだ。「真実」の根拠として，著者がアジア各国を回り取材したこと，またそこでの人々との交流から得られたことを挙げている。

本書を読み終えて，私の戦争に対する認識が変わったということはないが，「歴史」に対する見方には確かな変化があった。私にとって「歴史」とは，教科書に載っている過去の出来事という程度の認識でしかなかったが，本書を読んで，「歴史には〝光と影〟がある」ことを知った。また，近年騒がれている歴史問題についても「歴史問題とは，単なる過去史の解釈をめぐる摩擦ではなく，日本および日本国民の将来を担う安全保障問題」であることを知ることができた。

ここで得られたことは何も「歴史」に限定したことではないだろう。情報化社会と呼ばれて久しい現代にあって，与えられる情報の光と影を見極めること，そのために色々な立場から考察し，一方的な情報に流されない努力が必要なことなど，日頃から気を付け，鍛練を積まなければならないことへの警句を本書が与えてくれたのではないかと思う。

改めて，色々な本を読む必要性を感じさせてくれる一冊となった。

フレッシュマン紹介

千葉県立中学校
松井洋平

平成25年3月に大学を卒業し、今年度、教員生活2年目をむかえました、千葉中学校の松井と申します。昨年度の筑波大学のOB会に出席させていただく機会があり、この原稿を書かせていただくことになりました。筑波大学の卒業生で、主に千葉県の教員の集まりがあるからと、最初に招待をしていただいたときは、飲み屋の1部屋を貸し切って交流をするくらいのものかと思っていましたが、出席してみると、その想像を超える、大規模で立派な組織のOB会で、非常に動揺したのをよく覚えています。あれから1年が経とうとしているのかと思うと社会人になってから、時の流れが早くなったように感じます。

私は現在、縁あって高校の母校に勤務をしております。中高一貫になり、その中学校を担当しているので、母校のようで母校でない環境ではありますが、高校には、当時教わっていた恩師がまだ多く残っておられて、非常に心強い環境でもあります。ちょうど私が高校3年生の頃が、中学校の第1期生が入学してきた年にあたり、今年の3月、その第1期生が卒業をしました。それを思うと、自分が卒業してからわずかな年月しか経たずして、教員という立場でまた戻ってきたのだなあと、不思議な気持ちになります。正直、この1年勤務してみて、予想以上に大変で苦労したことも多々ありましたが、母校という貴重で恵まれた環境でスタートしているということを忘れず、それを誇りに、楽しく、充実した教員生活を送っていきたいと思っております。

平成25年度活動報告

6月30日　「青桐」第18号発行
7月7日　第一回青桐会幹事会
　　茗渓会千葉支部総会参加
　　（青桐会27人）
8月10日　占春会
10月12日　青桐会定例会（19人）
　　バーディホテル千葉
　　記念講演
　　「今、学校教育に
　　求められていること」
　　文部科学省国立教育政策研究所
　　教育課程研究センター
　　教育課程調査官　田畑淳一先生
3月15日　第二回青桐会幹事会

平成26年度活動計画

6月30日　「青桐」第19号発行
7月6日　第一回青桐会幹事会
10月11日　青桐会定例会
3月15日　第二回青桐会幹事会

平成26年度役員（案）

代表幹事	野口良和	（君津商業）
副代表幹事	林　広幸	（市立銚子）
	大木喜信	（県総教セ）
事務局長	田口亜紀子	（船橋）
事務幹事	峯　浩之	（成東）
	岩井　剛	（八千代西）
研修部	津田亘彦	（千葉女子）
地区幹事	中田滋己	（鶴舞桜が丘）
広報部	齋藤千尋	（市立船橋）
地区幹事	鹿野敏一	（佐原）

事務局　会員名簿の作成、支部事務局との連携
研修部　研修等への事務協力
広報部　機関誌作成等の広報活動

編集後記

今回、初めての編集作業に不安がありましたが、どうにか発行にこぎつけることができ嬉しく思います。多忙の中、秋山支部長はじめ、原稿依頼を快く受けていただいた先生方に、唯々感謝です。（喜）